

カルデアエピソード

えんじえる114

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

パツと思いついたネタを1話完結の短編で投稿するよ！

出てくるサーヴァントは基本的に自分のカルデアにいるサーヴァントだけ！

けど例外もあるからなにかリクエストがあつたら是非どうぞ！

超不定期だけど勘弁してね！

今のところマーリン、タマモサマー、エルキドウを考えてるよ！

まだ文には起こしてないからちよつと時間かかるよ！

あとこれ重要!!!

過度なキャラ崩壊あります！

嫌な方はバックバック!!!

目次

花の魔術師

ああ……いつからだろうか……

私の足元にはぐちやぐちやになった肉片。

それは人の形をしていたのだろうが、今では腕も足もちぎれ、腹は切り裂かれ、赤い何かでできた水溜りに沈んでいる。

沈んでいる肉片は1人、2人の肉片の量じゃない。

10人、20人……もしくはそれ以上の数の人だったものが肉片と
なつて沈んでる。

私はカルデアから支給された白かった魔術礼装を返り血で真っ赤に染め、ナイフ片手に肉片の中央で佇んでいた。

人だったものをこんな肉片に変えたのは……自分だ。

もちろん私はカルデアの誰かを殺したのではない。

そんなことは出来ないし、したくない。

彼らは人理修復のために一緒に戦う仲間だから、マッシュやドクター、ダヴィンチちゃんにサーヴァントのみんなと同じくらい大切だ。

「ふうん、これまたえらく血生臭い夢だなあ」

不意に背後からどこか胡散臭い声でそう言った。

振り返って見てみると、白い男性が立っていた。

彼は大きな杖を持っていて、不思議な存在感がある。

そう、カルデアにいるサーヴァント達と同じような存在感だ。

——あなたは？

「ん？私かい？」

・・・ そうだね、今は花の魔術師とでも名乗っておこうかな
君の名前も教えてくれるかい？」

――私は、藤丸立花。

「立花ちゃんだね！」

随分と暴れてたみたいだけど、そこで死んで転がってるのは・・・君
自身かい？」

――うん、そうだよ。

――怖い怖いって言って蹲ってるのも

――嫌だって言って逃げ出そうとしたのも

――なんで自分がって言って怒ってるのも

――何も言わないで諦めてその場で立ってるのも

――全部、私が殺したの。

そう、私は夢を見ると色んな自分が現れる。

それを自分はいつの間にか手に持つてるナイフで殺していく。

現れる自分の数は決まってないけど毎日毎日眠って夢を見るたびに
殺していく。

「どうして殺すんだい？」

――それは・・・それは自分が弱いから・・・

――夢に現れる弱い自分を殺さないと・・・

――殺さないときつと、目覚めた時も弱いままだから・・・

――私が弱いと前に進まないから・・・

――だから殺すの。

きつと現れるのは自分の恐怖や不安、怒りに諦め。
それを殺さないと現実に溢れて来ちゃうから。
そんなことしたらみんなに迷惑を掛けちゃう…

だから殺す、感情を表に出さないために。

「そう、か…：。じゃあこれからは殺す必要はなくなるね！」

彼がそんな風に呟いた瞬間。

真つ暗で血の赤色だけしか存在しない空間が、地面には草花が咲き
乱れどこまでも続いている。

空は無限に広がり、爽やかな青色。

そして包み込みように暖かな陽差しが差し込んでいた。

「…ここ、は？」

「気に入ってくれたかい？」

ここは理想郷。
アヴァロン

どこまでもいつまでも希望に満ちた大地さ。」

「…綺麗なところだね。

「…でも、なんで？」

「私は花の魔術師であり、夢魔でもあるのさ！

君も名前くらいは聞いたことあるだろう？」

夢魔は夢のエキスパート、君の夢を書き換えるくらいどうつてこと
ないさ！」

「…そうじゃなくて…：。なんで私に…：

「なんで、か…：

私はハッピーなのが好きだからね！

立花ちゃん。

君は少し頑張りすぎなんじゃないかな？

もう少し肩の力を抜いて、せめて眠っている夢の中くらいではね
！」

そう、か… 彼が言うならきつとそうなんだろう…

なぜかわからないけど正しいような気がする。

「人類最後のマスター、立花ちゃん。

君は綺麗な夢を見て、優しく素敵な朝を迎えるといい。」

「… い！… ばい！… せんぱい!!!」

「へ？は、はい！起きてます！寝てません!!」

「ふふっ… おはようございます、先輩！

とても穏やかに寝てらしたのですが、ドクターから次のレイシフト
のミーティングをするので起こして来て欲しいと…」

「んんん!!おはよう、マシユ！」

わざわざわざわざ起こしに来てくれてありがとうね！」

「フオーウ！フオー… ウ？フオーウ？フオーウフオー！」

「どうしたんですか？フオーウさん？」

「んー？何か伝えたがってるけど… なんだろう？」

フオーウ君が必死に何かを私に伝えようとしてるが残念ながらフオー
ウ語は理解できない。

「なにかわかりませんかからとりあえずドクターの所に向かいませんか？」

「うん、そうだね。」

「すぐ用意するからちよつと待ってて！」

ドクターの所に行くためにマシユと廊下を歩いているとマシユが思い出したように私に聞いて来た。

「ところで先輩。先ほどとても穏やかに寝てましたが、なにかいい夢でも見れたのですか？」

「ん？えーと…っ。すっごい綺麗な花畑で誰かと話してる夢…っ。だったと思う」

「誰か、ですか？」

「うん、誰かと一緒にいたはずなんだけど…っ。思い出せない…っ。大切な、誰かだっと思うだけど…っ。」

「まあ無理に思い出そうとしても夢の中の出来事ですので、

それよりも急ぎましょう！」

ドクターやダヴィンチちゃんを随分と待たしてしまってます！」

「うん、そうだね!!」

それっきり彼女はすっかり悪夢にうなされる事もなく、順調にレイシフトを進めて特異点を修復して行く。

藤丸立花彼女と花の魔術師が出会うのはまだもう少し先のことだろう…

「こんにちは、カルデアのマスター君。

私はマーリン。人呼んで花の魔術師。

気さくにマーリンさんと呼んでくれ。堅苦しいのは苦手なんだ。」